

多賀谷左近三経石廟について

国 京 克 巳*

A study of the Tagayasakon Stone Mausoleum

Katsumi Kunikyo

This is a study of the Tagayasakon Stone Mausoleum in the town of Kanazu. The mausoleum, of stone, was dismantled and its remaining building materials, most of which are damaged, are now in the custody of the municipal authorities. I investigated the building materials of the dismantled Tagayasakon mausoleum and tried to restore the stone building to the original state. The following is a summary of the report :

- (1)The mausoleum was built around 1607 (Keicho 12) by the second generation head of the family.
- (2)The building is made of Shakudani stone and had a gabled roof.
- (3)The building is about 1.68 meters in beam length, measured inside between the pillars at the extreme edges.
- (4)The walls of the building were made up of stone plates in one with pillar forms and the stone plates were laid on their sides and piled up.
- (5)Some of the wall plates of the building are decorated with an image of Buddha in relief. A mausoleum with this style of wall plates is not often found.

1. はじめに

福井県坂井郡金津町柿原の公民館近くの、周囲を田畑に囲まれた土地（字墓堂）に、福井藩初期の重臣であった多賀谷左近三経の墓所がある。この墓所は、周辺農地の土地改良にともない平成2から3年にかけて金津町により町指定史跡として整備されたものである。敷地には、笏谷石の五輪塔1基と宝篋印塔2基、卵塔2基が祀られている（写真-1）。

この史跡整備時に五輪塔の台石として使用されていた基壇が解体され、中から以前墓石の覆屋であったとみられる多数の石廟部材が発見された。この石廟部材は、現在金津町役場に多賀谷左近三経の石龕の遺構として保管されている。しかし、石廟の実体については存在以外一切明らかにされていないのが現状である。本稿は、この石廟の遺構調査を行ない、その実体を少しでも明らかにしたものである。

2. 多賀谷左近三経家

多賀谷左近三経は、戦国末期常陸下妻城主で、戦国大名として活躍した多賀谷重経の長子として生まれ、天正19年（1591）以降結城秀康に帰属し、秀康の越前移封に従い、慶長6年（1601）坂井郡において3万2000石を拝領している¹⁾。三経は同郡柿原に居館を設け、加賀国と接する地域を一円的に知行所とし、慶長12年7月21日41才で死去した²⁾。その後、嫡男左近泰経が家督を相続し、大阪の陣で活躍した。2代泰経は元和2年に（1616）没し³⁾、養子の3代経政（泰経の弟）は家督を継ぐことなく、多賀谷家は廃絶した。その後、経政の子4代経栄は結城氏の名跡を継いだ結城秀康五男直基に仕官し、子孫は前橋松平家の家臣として幕末におよんでいる⁴⁾。

* 建築学専攻

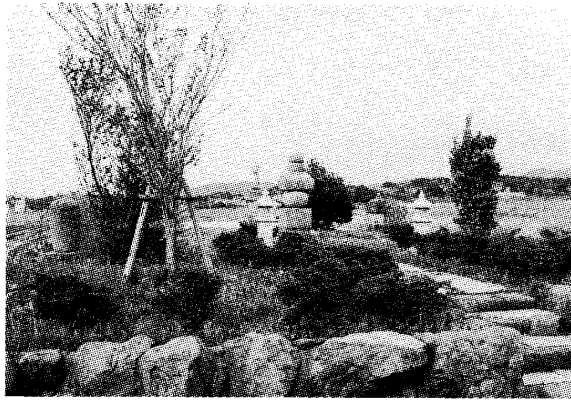


写真-1 多賀谷左近三経墓所



写真-2 基壇の解体工事中 (金津町教育委員会提供)



写真-3 石廟遺構



写真-4 石廟遺構

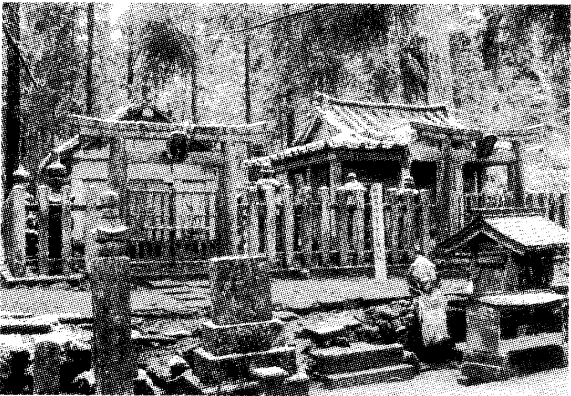


写真-5 第1類 (結城秀康石廟)



写真-6 第2類 (春香院石廟)



写真-7 第2類 (滝谷寺開山堂)

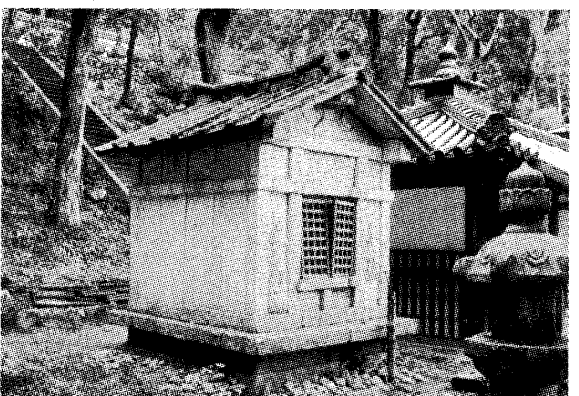
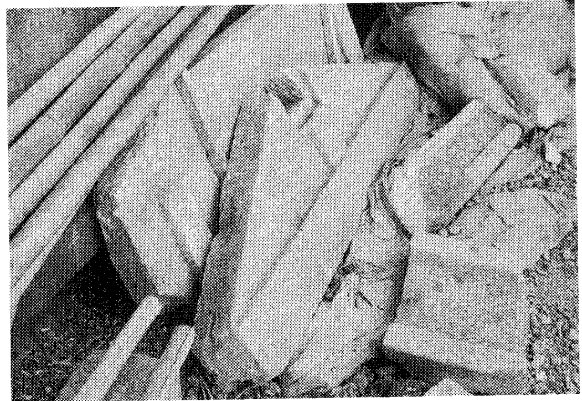


写真-8 第2類 (京極高次石廟)



写真－9 第3類（土屋正明廟）



写真－10 妻壁部材

3. 石廟遺構

石廟遺構とみられる五輪塔基壇の解体は、平成2年3月に行なわれた。工事写真によれば、その様子は以下のである⁵⁾。基壇は二重となり、上部基壇は約1.5m四方の高さ約60cmとなり、周囲を板石で囲み、上面に厚十数cmの板石を敷き詰めていた。その内部は石廟の棟石部材とみられる破片などや砂利などが詰められていた。一方、下部基壇は約2m四方の高さ約45cmで、基壇の下方が地面に埋まっていた。下部基壇は周囲を柱形状の突起のある板石で上部基壇同様に囲み、上面に厚十数cmの板石を敷き詰めていた。内部の様子は工事写真がなく明らかではないが、現在残された部材遺構の量から考えて、上部基壇以上に多数の部材が内部に詰め込まれていたと考えられる（写真－2）。

三経の石廟遺構と伝えられる部材は笏谷石製で、金津町教育委員会の調査によると130点を数える。これらの部材は、大きいものでは幅2m高さ0.5m厚0.17m余に達し、一人で移動できないものから、幅0.14m高さ0.21m厚0.07m余の片手で持てる小さな破片まで様々である。その多くの部材は、その端部の様子からみて、当初の完全な形を残しているものは非常に少なく、ほとんどが折損し、石廟の部材の一部分とみられるものばかりである（写真－3, 4）。遺構は、屋根の板石のように明らかに石廟の部材位置が想像されるものから、全くわからないものまで様々である。この他に三経の菩提寺である金津町柿原の専教寺に石仏の彫られた壁板とみられる部材が1ケのこされている。

4. 笏谷石石廟の型

前述のように石廟の遺構とみられる部材はその多くが破損し、旧状を留めるものが非常に少なく、その復元は非常にむずかしい。ところが、現存する笏谷石による石廟は外観や部材の構成の仕方によって、3種類に分類される。この分類によると石廟は下記ようになる。

1) 第1類

高野山にある福井藩祖結城秀康とその母長勝院の石廟がここに分類される。大きさは秀康廟が間口約5m奥行約3.8m、長勝院廟が間口約2.8m奥行2.2mの大きな建物で、柱が独立し、その間に板壁を落し込むもので、屋根は平瓦と丸瓦からなる本格的な石瓦葺の建物である。屋根形式は入母屋造りと切妻造りの建物で、梁や桁は石で造られるが、内部に木製の芯木を入れている。基壇は低く、壇上のものが2段程あるのみである（写真－5）。

2) 第2類

屋根が長い板状の石で葺かれ、外観は瓦棒葺きにみえる切妻造りの石廟である。この中には柱と壁の

部材名		部材番号																															
棟石	76,77,78,79,80,108																																
	屋根板	2,5,6,7,20,21,22,23,24,35,37,38,40,43,44,48,50,52,58,59,84,85,86,92,98,103,104,106																															
妻壁	17,25,130																																
軒桁	34,65,66																																
壁板,床板	板石幅																																
	厚さ (cm)	31.0	34.2	38.5	39.0	39.5	40.0	40.5	41.0	41.5	42.0	42.5	43.0	43.5	44.0	44.5	45.0	45.5	46.0	46.5	47.0	47.5	48.0	48.5	49.0	49.5	50.0	50.5	51.0	51.5	不明		
	10			18											114															42,47	9	1,60,73,89,91,94,96,97,105	
	凸型				33																		123							10,11,31	15,124	51,129	
	10.5				45																										36	36	57,109
	凸型																															56	
	11																																
	凸型																																
	11.5	112	117																28														
	凸型											39																					
	12											119,120																					
	凸型																																
	12.5																																
	凸型										41	113									14	126											
	13																																
	凸型																				69			13									4
	13.5																																
	凸型												121										127 (LL)										
	14																																
	凸型										111																						
	14.5																																
	凸型																																
特殊材	幅31厚15～16程度で幅約13の溝が中央にある (54,74,75,83) 幅31厚16程度で幅約13の溝が一部にかたよってある (63,64) 幅31厚15程度で幅約15の溝が一部にかたよってある (116) 幅30厚12.5程度で幅約10の溝がかたよってある (61,62)																																
不明	幅6.5の溝がある (41)、厚5の突起がある (88)																																
墓石部材	8,18,49,53,57,67,68,70,71,72,82,87,93,98,99,107,110 16 (受花) 32 (宝篋印塔基礎) 81,100 (受花) 101 (宝篋) 102 (五輪塔上部)																																

注 部材番号は金沢町教育委員会の多賀谷左近石倉の整理番号をもちいた。
 専 (LL) は専教寺に保管される部材をしめす。
 石材寸法は数字の近い方に含めた。

表-1 部材の分類

構成の仕方から、柱と壁がそれぞれ別々の部材からなるものと、一体として造られるものがある。前者は石川県金沢市の野田山墓地内にある加賀藩の春香院石廟や富山県高岡市瑞龍寺の前田利長石廟のように壁石が縦に嵌め込まれるものと（写真－6）、福井県三国町の滝谷寺開山堂（元龜3年）のように横に嵌め込まれるものがある（写真－7）⁶⁾。前者でも内法長押より上の壁は一体ものとして造られ、横嵌めの壁となる。

一方、柱と壁が一体として造られる石廟は、比較的小さなもので、金沢市の野田山墓地や高岡市瑞龍寺の小さな石廟、滋賀県山東町清滝寺の京極高次石廟、北海道松前町の松前藩主松前家墓所内の多くの石廟がある（写真－8）。

これらの石廟の大きさは間口及び奥行が2 m前後あるいはそれ以下の建物で、壁面には柱型の他に地長押や内法長押を彫り出している。石廟は平入の滝谷寺開山堂と京都市の本満寺結城秀康夫人石廟を除いて、妻面に石製または木製の開き扉を備える妻入りである⁷⁾。

3) 第3類

屋根石が1個あるいは数個からできていて、屋根瓦の表現は一切ないものである。福井県武生市の正覚寺吉松丸霊屋や同大野市の善導寺土屋正明石廟などで、その大きさが間口奥行共1.5 m以下の小さな石廟である（写真－9）⁸⁾。

以上の三種類の石廟は、大きさに関係なく下部に基壇をもつものが一般的であるが、滝谷寺開山堂、松前家墓所内の石廟群、善導寺土屋正明石廟などのように基壇をもたないものもある。また、内外は別にして壁面に石仏を彫り込むものや、内部に絵などを描く石廟もある。

5. 三経石廟部材の分類と復元

5. 1 部材の分類

以上のように分類された石廟の外観や部材構成を念頭に、三経石廟の残された部材を検討すると、各部材は表－1に示すように石廟の建築部材ごとに分類できる。明らかに石廟の一部材と部材名が判明するもの、部材名は確定しないが壁板や床板と考えられるもの、部材名称はわからないが形状が特殊で特別な場所に使用されていたと考えられるもの、小破片により全く不明なもの、石廟の部材の一部でないものである。部材名が判明するものに、屋根の瓦棒状の板石、棟石、妻壁面、軒桁がある。これらの遺構から三経石廟は、屋根外観が第2類の瓦棒葺きにみえる切妻造りの石廟に属するものであることがわかる。これらの部材から妻側の壁面の大きさや屋根の大きさが判明する。

一方、石廟の部材でないものには宝篋印塔や五輪塔の部材が含まれる。このうち宝篋印塔部材には後述する墓所内の宝珠を欠損した宝篋印塔の一部とみられるものもある。壁板や床板と考えられるものはその石材の小口の加工状況から、当初の板石幅や部材の基本的厚さ（平板な部分）が確認できるものがある。

5. 2 屋根の復元

遺構から屋根板石は幅が約41 cm、重ね部分が約4.5 cm、有効葺足の幅が36 cm前後となる。板石の重ね部分は幅約10 cm厚4～5 cmの目板を打ち付けたように加工され、板石を葺いた時、一見石の瓦棒葺きのようにみえる。この目板状部材の大きさや間隔は、棟石に台形状に彫られた穴の大きさや間隔にほぼ一致する。一方、屋根板石の長さは完全な部材が残らず、はっきりしない。しかし、桁に屋

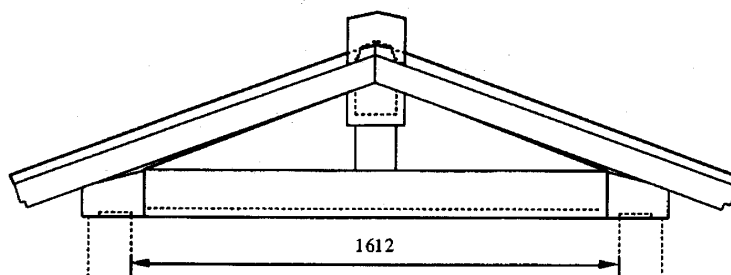


図-1 石廟の妻側屋根復元図

根板石を引っ掛けたとみられるこぶ状の突起ののこる部材や、けらば軒先の桁石の当り加工痕がのこる部材から、軒の出が判明する。それによれば、屋根の出は軒桁外面から約21cmであったことがわかる。さらに屋根板石は、一枚当たり2本の6分径の釘によって棟に固定されていたことも板石に残る痕跡からわかる。

棟石は幅18.5cm高さ17cmの大きさで、両端で多少反りあがっていることも確認できる。棟石は内側を半円状にくり抜き、屋根板石の目板部分と重なる部分は彫り抜かれている。棟石の継手は相欠となっている。

妻部分は梁・棟束・壁が一体で造られ、梁・棟束が彫り出されている（写真-10）。棟木部分は幅13cm高さ11cmの大きさに削り貫かれていて、別部材となった棟木が取り付けいていたことがわかる。この棟木は第2類石廟の屋根板の支え方や、遺構としてののこる屋根板石の釘穴から考え、木製の部材が使用されていたことが考えられる。また、妻壁の棟木取合部の外壁側は、一回り大きく彫り込んで加工されている。このような小さな建物で、棟木の大きさを建物の内外で変えることは考え難いので、滝谷寺開山堂のように棟木をそのままみせるのではなく、前田利長石廟のようにケラバのみ棟木を石で包んでいたことが考えられる。妻壁の梁下部には幅7cm深さ3cmの溝が彫ってある。また、別の妻壁残片の梁下部には幅10cm程の溝が彫ってある。

桁石は幅23cm高さ15.5cmの台形で、長さ105cmの完全な部材が1個のこっている。この部材下部には幅10.5cm深さ2.4cm程の溝が彫られ、板壁の厚さが10cm程度のものが使用されていたことが想像される。また、桁端部から20.5cm内側には前述の妻壁当りの欠き込みが残っている。これにより妻側の桁の出が判明する。

ところで、妻壁の梁下部の溝幅から予想される壁厚は前述のように桁下部と一致するものと、狭く一致しない部材がある。妻壁の左右で溝幅が異なることは、左右で下部の形態が異なっていたことが予想される。溝幅の狭い部分には、下にあまり力をつたえる必要がない入口などの開口部が考えられる。このことから石廟は妻入りの平面をもつことが想定できる。

以上を図面化すると、図-1のようになる。石廟妻側の梁間長さは、両端にあったと思われる柱型の内側で約1.61m前後となることがわかる。一方、桁方向の長さは棟石や屋根板の目板間隔および桁石痕跡から考え、柱型の内側で約1.67m, 2.05m, 2.40mの何れか付近となることが想像される⁹⁾。

5. 3 壁・その他の復元

板石は小口の加工状態から折損した部分か、当初の部材のままであるかは判断でき、これにより部材の幅が判定できる。もちろん板石の長さも同様であるが、一部の部材を除きほとんどが折損していてそ

の長さを確認することはできない。板石幅の分布も合わせて示す表－１によると、特に幅の狭い31 cm、34.2 cmを別にすると、石材の幅が38.5～39 cm、40.5～43 cm、44～48 cm、50～51.5 cmに分類できる。石材の加工精度や実測精度から1 cm前後の誤差は十分考えられるから、それらを考慮すると石材に39 cm、42 cm、45 cm、46.5 cm、51 cm前後の規格幅の存在が確認できる。一方、板厚についても、10 cm前後、12 cm前後と13および14前後 cmに分類できる。以上から板石を床板あるいは壁板に区別することはむずかしいが、板石に彫られた石仏の配置の仕方や、板石の小口にみられる金物補強の痕跡から壁板となる部材は横使いを基本にしていることが確認できる。

ところで、板石には石仏と同様に柱型や長押などとみられる部材を彫り出しているものがあり、明らかに壁板とみられる。これら板石の凸型部材幅と壁板幅および壁厚の関係を整理したものが表－２、３である。横使いの壁面に縦方向の凸型部材には10 cmと14 cm前後のものがみられ、横方向の凸型部材には10 cm、14 cm、17 cm前後のものがみられる。壁面に縦方向の幅14 cm前後の凸型は、壁厚や板幅に関係なく全般的にみられることから、石廟壁面に上下に取り付く部材として柱型が推定される¹⁰⁾。縦方向の幅10 cm前後の凸型は、基本板厚が10 cm程度で、壁幅が50 cm付近に集中している。前述の屋根復元の項で、桁や梁と取合う壁は10 cm程度と推測されているので、このことを合わせて考えると、軒桁や梁に近い縦方向部材の束あるいは小柱などが考えられる。また、柱型とみられる凸型のある板壁は、板幅34 cm、42.5 cm、47 cm、51 cm程度の板幅に分類でき、壁は壁板が4種類の幅を持つ4段程度の部材で、上下に積層して構成されていた可能性がある。

一方、横方向の凸型は幅17 cmに特に集中してみられ、この部分の板厚が10 cmで、板幅が50 cmとなる。幅17 cmの突起はこれらの部材の板端部につくられ、同じ面に彫られる縦方向の柱や小柱・束型の壁面よりさらに3 cm余りも手前に突出していて、断面では17 cm角の大きさとなる。さらに横方向の凸型と反対側の小口には、金物の痕跡がみとめられる。このことからみて、横方向の凸型は土台や地長押などの部材が想定される。また、幅10 cm前後の凸型は、数も少なくはっきりしないが、壁からの出が柱型よりわずかに少ないので、無目などの材が想定される。

この他に幅14 cm程の横方向の凸型もみられるが、これは縦方向の幅14 cmの凸型と同一面に加工されていて、板幅も42.5 cm前後で一群をなしている。この板石4枚（部材数5枚）は部材が完全な形でこのこっており、その長さや小口に残る金物の痕跡により、この部材の取り付く間口が想定される。それによれば、石廟の梁間は柱内々で175 cm、桁行が柱内々で199～200 cm以上と確認できる。すでに前項の屋根の復元から梁間寸法は、柱型を除く柱内々で約161 cmと推定されるから、この部材寸法といづれも合わない。このことから板幅42.5 cm前後の部材は石廟の一般的な壁とは異なる位置に取り付く部材と考えられる。既存石廟の形態を参考に壁状の部材をさがすと、基壇の壁部材が考えられる。現存する石廟はこの部分がすべて横使されていて、上部の壁幅と基壇の壁幅が一致しておらず、三経石廟と似ている。しかし、ほとんどの石廟の基壇の壁板は高さが低く、推定される三経石廟の基壇の高さと大きく異なり、疑問も残る。また、4枚の内1枚には横方向凸型が全くみられないのも問題がのこる。なお、小口の金物痕跡がのこる面と反対側に横方向の凸型が造られており、この部分が下方に位置していたとみられる。

ところで表－１の特殊材には、幅約31 cmで上面に幅10、13、15 cm程度、深さ約3 cmの溝のある部

板壁幅 (c m)	凸型幅 (c m)														
	縦方向											横方向			
	10	10.5	11	11.5	12	12.5	13	13.5	14	14.5	15	11	14	14.5	17
31.0		112													
34.2										117		117			
39.0		33													
39.5															
40.0															
40.5															
41.0							111		111						
41.5															
42.0								119	118,120	119			118	119,120	
42.5										121				121	
43.0									122						
43.5															
44.0															
44.5															
45.0															
45.5															
46.0															
46.5										128 (仏)					
47.0								127 (仏)	127 (仏)						
47.5	専 (仏)														
48.0											123				
48.5															
49.0															
49.5															
50.0	(10), 11, 31											125			(10), 11, 15, 31, 32
50.5		15							124						
51.0		51, 129													
51.5		56						129							

表－2 板幅と凸型幅

板壁厚さ (c m)	凸型幅 (c m)														
	縦方向											横方向			
	10	10.5	11	11.5	12	12.5	13	13.5	14	14.5	15	11	14	14.5	17
10.0	(10), 11, 15 (仏)	15, 31, 51, 129						129	124		123				(10), 11, 15, 31
10.5		33, 56													
11.0		112										117			
11.5								119	120					119, 120	
12.0									118				118		
12.5										128 (仏)					
13.0												125			125
13.5								127 (仏)	127 (仏)	121				121	
14.0							111		111, 122						
14.5															

表－3 板厚と凸型幅

材が多数ある。このうち溝幅 10 c m の部材は、石厚が 12.5 c m で他部材の 15 ～ 16 c m より薄く、別部材とみられる。溝幅 13 c m の部材は上面中央に溝が彫られ、L 型に溝を曲げて彫られる部材もみられる。溝幅 15 c m の部材は長手方向の中央 86 c m 部分に溝がみられない。これらの部材は上面及び側面がツルばつりの上からきれいに仕上げ、下面は粗いツルばつりのままである。このことを重視すると、この部材は土に接し、下面が見えない板壁などを受ける基礎と想定され、溝のない部分は出入口などの部材の取り付けかない部分と考えられる。

石廟遺構の中に、一際目立つ石仏の彫られる壁板が 4 枚ある。この壁板は基本の厚みは異なるが、すべて 46 c m 前後の板幅で、その内 3 枚には柱とみられる凸型があり、残りの 1 枚も小柱とみられる凸型がある。前者の壁板は、石仏が壁に取り付く位置やその大きさが良く似ていて、石廟の同一面あるい

は同一高さにあったことが容易に想像される。一方、後者は石仏が壁いっぱい大きく配置され、その数も多く、間隔も狭く、別の建物部材のように感じられる。しかし、石仏の彫り方は良く似ており、同じ石廟に使用されていたものと思われる。このように変化に富んだ石仏群を外壁面周囲に取り付けた石廟は数が少なく、現存する石廟では国の重要文化財となる結城秀康とその母長勝院の石廟の他に、春香院石廟や前田利長石廟のみである。また、内部壁面に石仏のみられる石廟は、結城秀康夫人石廟や滝谷寺開山堂のみである¹¹⁾。

以上から三経石廟は、石廟の分類では壁が横壁となり、第2類の滝谷寺開山堂と同じタイプとみられるが、柱と壁が一体として造られ、層状に積み上げられた新しいタイプとみることができる。また、外壁周囲に石仏をともなう数少ない貴重な石廟であったことがわかる。

6. 左近三経の石廟年代

前述のように整備された多賀谷左近三経の墓所には、五輪塔1基、宝篋印塔2基、卵塔2基が祀られている。墓所の正面にある高さ約2.1mの五輪塔は三経の墓で、背面銘から寛文2年(1622)に子孫によって建立されたことがわかる¹²⁾。宝篋印塔は高さ2.05mと1.2mで、大きい方はよく保存されているが、小さい方は笠部から上の部分が欠損している。大きい宝篋印塔の塔身正面には「…拾二□□年…祥堅居士 七月二十□」とある。この年月日は三経の死亡時期と一致し、祥堅居士は法名の一部であることが確認でき、これも三経の墓であることがわかる¹³⁾。小さい宝篋印塔は、形式的に前者と同じで、大きさが一回り小さく、細部の飾突起や基礎の格狭間の彫が浅く、建立時期は新しいように感ぜられる。誰の墓であるかは不明であるが、2代泰経あるいは早死にした泰経の子とも考えられる。大小2基の卵塔は銘がまったくなく、誰の者かはわからないが、墓の様式から僧侶のものと考えられる。

石廟の部材はこれらの墓と同じ墓所に残っていたことから、三経の石廟と考えられ、石廟の建設年は墓石の建設年と同じ慶長12年頃と、寛文2年が考えられる。慶長12年頃は三経の嫡男で2代の泰経が跡を継ぎ、活躍した時期である。泰経の石高は慶長19年の大阪冬の陣における福井藩の備次第には六番として高三万二千石とあり、三経同様泰経も重臣であったことがうかがえる¹⁴⁾。

一方、寛文2年は4代経栄が福井藩と親戚筋の松平直基に新たに家臣として召し抱えられた慶安元年(1648)以後の時期である¹⁵⁾。この時は初代や2代のような石高は到底考えられず、まして他藩の領地に石廟を建設することは不可能に近かったと考えられる。以上のような状況を考えると、石廟は三経の死去した慶長12年頃に2代泰経によって建設されたことが十分考えられる。ちなみに三経石廟は、屋根の目板と棟の納めが元亀3年(1572)建立の滝谷寺開山堂や、慶長14年以降建立の京極高次石廟と同じで、慶長19年以降建立の前田利長石廟や元和5年以降建立の結城秀康夫人石廟のように整備されてはおらず、石廟の建築様式から判断しても妥当といえる¹⁶⁾。

ところで、石廟と宝篋印塔がすでに存在していたのに、なぜ寛文2年に五輪塔が新たに建設されたが問題となる。可能性として考えられることは、2代泰経が元和2年(1616)に死去した後、養子の弟経政は3代としての跡目相続を福井藩から許されなかったことと関係するとみられる。元和2年から4代経栄が仕官する慶安元年の34年間に三経墓所が荒廃したことが十分考えられる。そして再仕官後の三経47回忌の寛文2年に改めて墓所を整備し、五輪塔を建立したことが考えられる。

7. まとめ

以上の考察から次のことがいえる。

- 1) 多賀谷左近三経の石廟は、慶長12年頃に2代泰経によって建設されたことが考えられる。
- 2) 石廟は、瓦棒状の屋根をもつ切妻造りの形式で、妻入り建物と考えられる。
- 3) 石廟の大きさは柱型の内側で梁間約1.61m前後となることが考えられる。
- 4) 石廟は柱と一体となった板壁を横使し、層状に積み上げて構成されていたと考えられる。
- 5) 石廟は、外壁周囲に石仏をとまなう数少ない貴重な石廟であったと考えられる。

謝辞

調査に際して、金津町教育委員会生涯学習課、専教寺、福井市総務部市史編さん室ならびに多賀谷氏に調査の便宜をお計らい戴きました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- 1) 『福井市史資料編4近世2』福井市 昭和63年3月所収 p184
- 2) 多賀谷繁太郎家文書「多賀谷之系図」
- 3) 『国事叢記』福井郷土誌懇談会 福井県立図書館 昭和36,37年 元和元年の項に「古老曰(中略)多賀谷左近死去。息男二歳。有故跡目断絶。右近狐付乱心。」とある。 p81
- 4) 『福井市史資料編4近世2』福井市 昭和63年3月 多賀谷繁太郎家文書の解説による。
- 5) 金津町教育委員会に保管される工事写真による。
- 6) 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡朝倉義景廟修理工事報告書」 福井市教育委員会 平成11年3月 p26参照 この建物には長押は一切ない。
- 7) 結城秀康夫人は慶長12年に秀康死去後、烏丸大納言光広に再嫁しているので、廟名については検討を必要とする。
- 8) 前掲6) p27参照
- 9) 桁側の屋根長さは棟石が完全な形でのこっていないので、棟石の残存遺構の長さ目板彫りの間隔から長さを想定した。一つに決まらないのは、桁下にある壁板の横幅が3種類想定され、どれも決め手を欠いたためである。
- 10) 梁間の柱内々寸法が1.57mとわずかに三経石廟より小さい京極高次石廟の柱幅は12.5～13cmとなる。
- 11) 石廟正面にのみ石仏を取り付けるものに、京極高次石廟、金沢市野田山墓地内の前田利貞石廟、前田道貞石廟、妙成寺の浩妙院石廟、寿福院石廟がある。
- 12) 五輪塔銘「多賀谷左近……末孫……者也寛文二壬寅年六月十八日」
- 13) 前掲2)
- 14) 前掲3) p55「本多伊豆守奉御家中触御備次第(中略)六番 高三万二千石 多賀谷左近」
- 15) 前掲2) および多賀谷繁太郎家文書『福井市史資料編4近世2』昭和63年 所収 一六一号文書 p822
- 16) 石廟の建築様式や変遷については、稿を改めて報告する予定である。

(平成14年12月6日受理)